

大学改革支援・学位授与機構令和元年度人材育成セミナー
「大学等の幹部教職員向け IR セミナー」趣旨説明

研究開発部客員教授
(首都大学東京理事)

吉武 博通

yoshitake.hiro.fw@u.tsukuba.ac.jp

1

IR が重視される背景

- 戦略・計画の重要性
 - 個性・特色の明確化、限られた経営資源の最適配分、
 - 興味・関心に基礎を置く学問研究の尊重と社会的要請への対応
- 教育研究活動と経営の高度化に向けた持続的な改善活動
 - 教学マネジメント改革、学修成果の可視化、内部質保証
 - 個々の研究力の強化、学際研究や組織的研究の促進、社会実装への貢献
- 評価
 - 第三者評価
 - 自己点検・評価
- 社会への発信、説明
 - 自学の現状の正しい把握・理解なしに有効な発信、説明はできない

2

森利枝「米国における学修成果可視化の展開」
『カレッジマネジメント』No.208/Jan.-Feb.2018,pp54-57 より

- 高等教育界全体のマクロな視点で捉えると、
 - ・ 2005年、第2次ブッシュ政権下において「スプリングズ委員会」設置
大学が公財政支出や授業料の支払いに見合うだけの学修成果をあげているかを証拠立てさせたいという政策意図
 - ・ 2009年度、オバマ政権下で特別措置法に基づく教育予算の大幅な拡大を図る一方で、各高等教育機関の達成に関する説明責任と効率性への要求を継続
→ 高等教育機関がその要求に応えるかたちで、おのこの達成状況を数値で公開
 - ・ 2015年、カレッジ・スコアカードの公表を開始
学納金、卒業率、過去の在籍者の収入、要求されるSATのスコア、課程の専門領域等の情報を統一されたフォーマットで公開 → 批判も集めている
- 高等教育をミクロな視点で見ると、
 - ・ 2000年代に入ってから注目、あるいは再注目された道具立ては概ね学修成果とは可視なものであり明確に記述されうるものであるという発想に基づいて開発されている
ルーブリック
MOOCs(Massive Open Online Courses)
CBE(Competency Based Education)

3

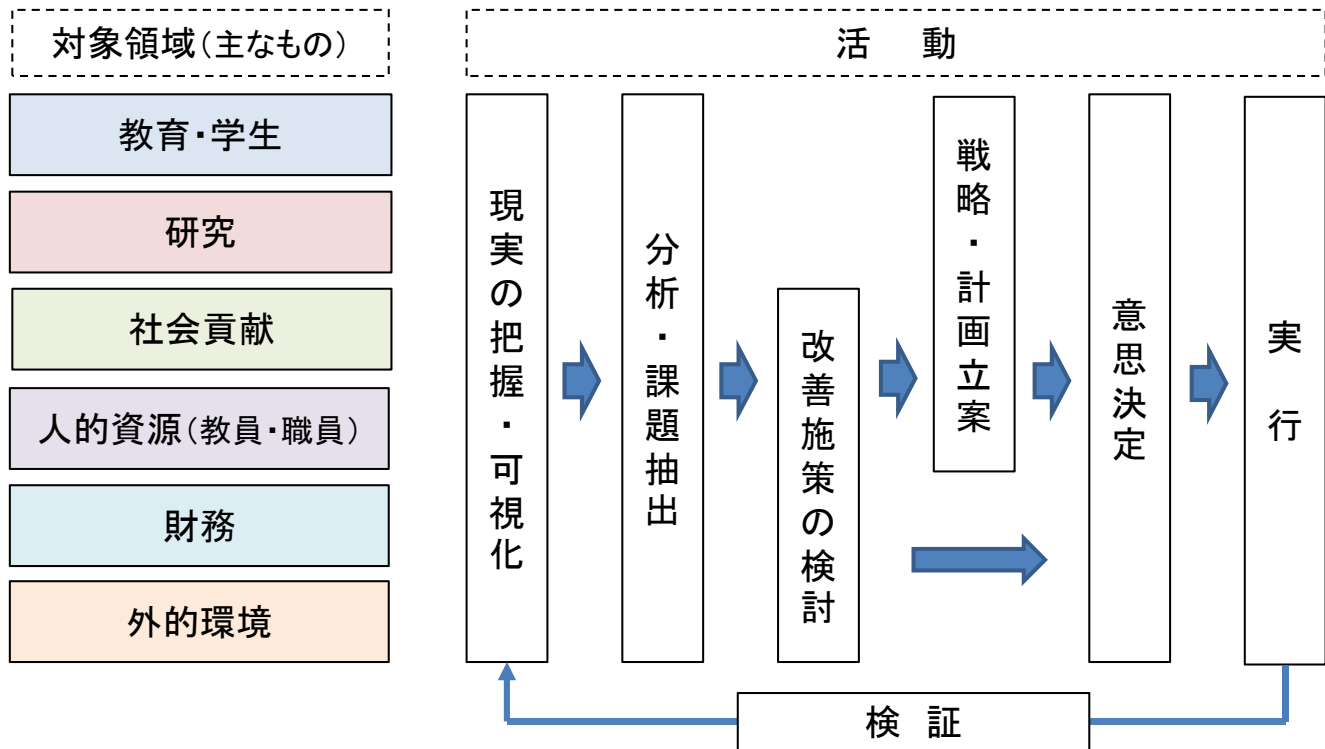
金子元久「「可視化」のコンテクスト」
『IDE 現代の教育』No.590(2017.5) より

- アメリカで1980年以降に進められてきたことを概観すると、おもに三つの流れに整理できる
 - 1) 能力への関係づけ
 - ・ 大学教育が形成する知識・能力を定義することによって、大学教育とその成果との関係を明確に概念化しようという動き
 - ・ 学術的に整理・体系化された知識・技能は実際の職業の場ではあまり用いられず、重要なのはコミュニケーション能力、文章能力、思考能力、さらに人格的な成熟度、といった汎用的な能力
→ AAC&Uは大学教育が形成すべき能力を定義し、3分野、16種類の能力リストを作成
 - 2) 測定(教育成果の測定)
→ ルーブリック、VALUE(Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education)ルーブリック
 - 3) 意味づけ
 - ・ 学生の側から、大学教育の過程で身に着けたものを「意味づけ」させること → 学習ポートフォリオ
- 課題
 - 1) 学習成果の可視化の方法は、大学教育の実態と社会的要求との葛藤の中で、試行錯誤を通じて形成されてきた多様なものであって、整然とした体系を持っているものではない
 - 2) 大学教育が個々の授業科目の単なる集合ではなくて、教育課程の全体を通じて学生の知識・技能を形成し、成長させていく、という発想。組織としてのフィードバックを通じた改善のプロセス。
 - 3) どのような知識・能力を概念化し、測定するか、そしてそれをどのように形成するか、というきわめて困難な問題が伏在する。大学の教職員が、その困難な問題に対する、彼ら自身の回答を模索するプロセスこそが重要。

4

IRに関する概念整理

IRの定義: 機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供するために機関内部で行われる調査研究～Saupe (1990)



5

「平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について」より 2019.5.28文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室

全学的なIRを専門で担当する部署の設置状況

専門の担当部署を設けている H24 10.6% → H28 36.8%

教職員の併任による委員会方式の組織を設けている H24 10.6% → H28 25.9%

IRを専門で担当する部署に専任の教員を置く大学 H24 2.6% → H28 10.6%

IRを専門で担当する部署に専任の職員を置く大学 H24 8.9% → H28 28.4%

IRを専門で担当する部署における業務

学生の学修成果の評価のためのデータ収集、評価の実施、分析 23.7%

自己点検評価に必要なデータの収集や分析等、自己点検評価に関連する業務 22.7%

学生の学修時間の把握のためのデータ収集、分析 20.8%

認証評価機関への報告書の作成や必要なデータの収集等、認証評価に関連する業務 19.3%

学生、大学教員、大学職員に関するデータ収集、分析 18.3%

学内の意思決定に資する提案書の作成 16.2%

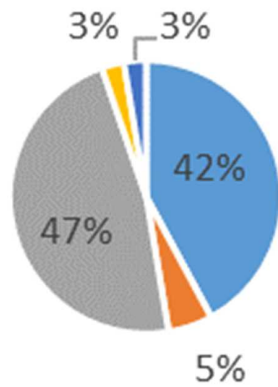
予算・財務計画の策定のためのデータ収集、分析 4.6%

6

申込入力概要 参加者の割合

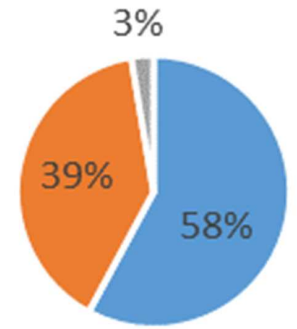
所属機関設置者別割合

国立大学	16
公立大学	2
私立大学	18
国立高等専門学校機構	1
その他	1



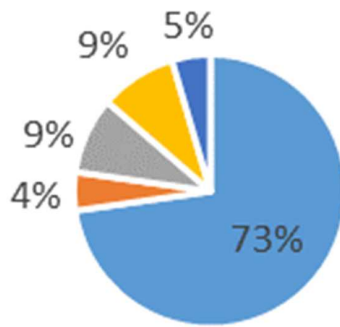
職種割合

教員	22
職員	15
その他	1

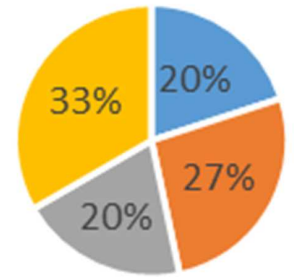


役職割合

教員	
役員	16
学部長	1
室長	2
部長	2
その他	1

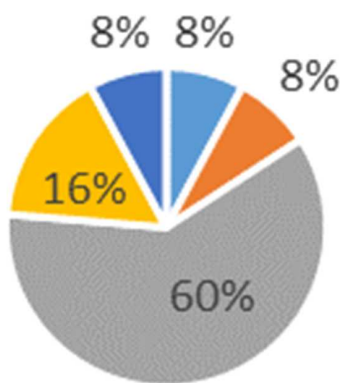


職員	
事務長	3
部長	4
室長	3
その他	5



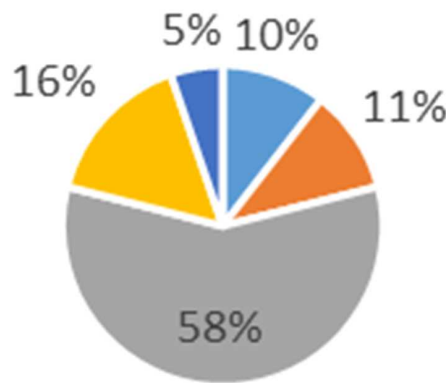
申込入力概要 参加者の状況、関心等

データの整理、活用



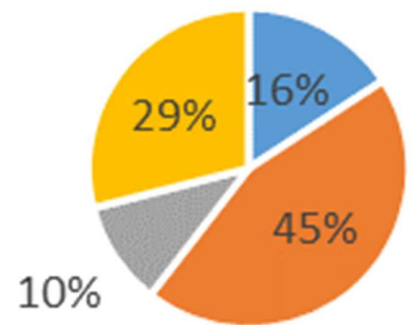
とても良い	3
良い	3
どちらともいえない	23
悪い	6
とても悪い	3

IR体制の整備状況



とても良い	4
良い	4
どちらともいえない	22
悪い	6
とても悪い	2

本セミナーで最も関心が高いもの

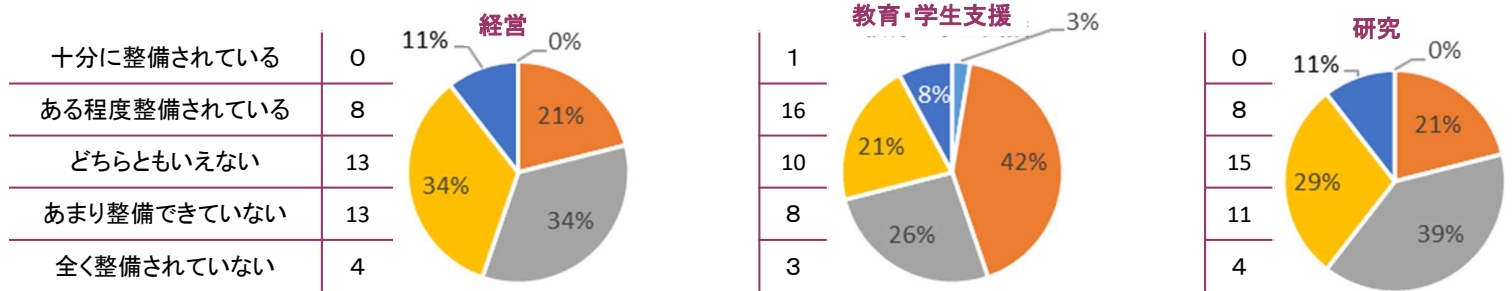


経営	6
教育・学生支援	17
研究	4
その他 (IR体制全般)	11

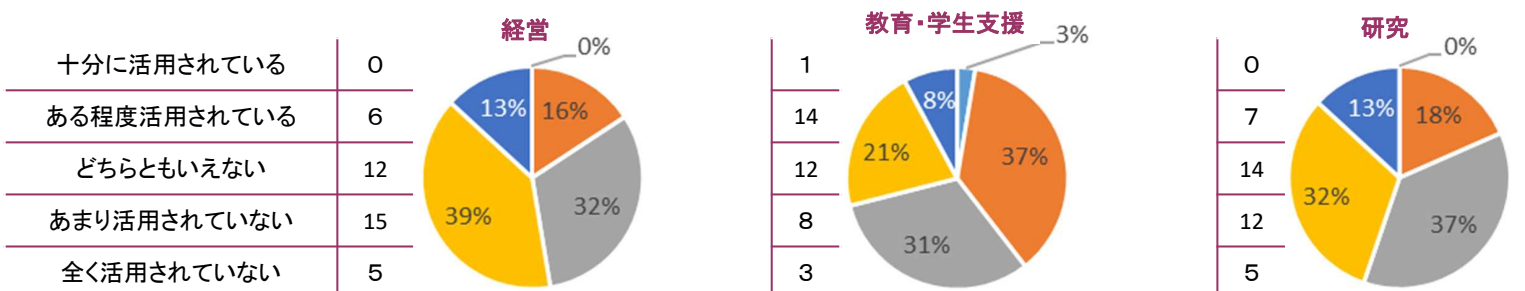
※ 一部内容の変更があったため、配布資料と異なる値が含まれます。

申込入力概要 参加者の大学の状況

各テーマにおける自大学の整備状況



各テーマにおける自大学の活用状況



IRとKPI(=見える化)による大学機能の高度化

- IR (Institutional Research) への関心の急速な高まりと活動の拡大
- 行政、教育、医療においても重視されはじめたKPI (Key Performance Indicator)
- IRとKPIの本質は「見える化」
- 「見える化」とは ~ 遠藤功(2005)『見える化』東洋経済新報社より
 - ・ 同じ目的に向かって仕事をしていても、「見えていない」部分のほうが圧倒的に多い
 - ・ 「見える」ことは本質的な競争力の源泉
 - ・ 「見せよう」という意思と「見える」ようにする知恵の2つが必要
 - ・ 「見える化」の落とし穴：
 - IT偏重 → デジタルとアナログの使い分けが大事
 - 数値偏重 → 「データはもちろん重視するが、事実を一番重視している」(大野耐一)
 - 生産偏重 → モノづくりの現場だけでなく、すべての職場において見える化を徹底
 - 仕組み偏重 → 「感度」の大切さ
 - ・ 「良い見える化」は、「気づき」を育み、「思考」を育み、「対話」を育み、「行動」を育む
「気づき→思考→対話→行動」という影響の連鎖により問題解決が促進される

グループディスカッションの目的と課題

グループディスカッションの目的

- 1) 議論を通して本テーマに関する理解を深める
- 2) 各大学に共通する課題を認識し、解決の道筋を探る
- 3) 互いの取組に学び合う

グループディスカッションにおける中心的なテーマ＝「問い」

グループごとに以下のAまたはBのいずれかの問いを選び議論してください
両方の問いについて議論していただいても結構です

<問 A>

IR体制の整備が進んでいないとしたら、その原因はどこにあるのか

<問 B>

IR体制の整備が進みつつある一方で、調査・分析が進まない、あるいはその結果が活かされていないとしたら、その原因はどこにあるのか